

Title	経済学と人間の労働：「労働」から「活動」へ
Sub Title	Political economy and labour from labour to action
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1995
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.3 (1995. 10) ,p.333(1)- 346(14)
JaLC DOI	10.14991/001.19951001-0001
Abstract	
Notes	会長講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19951001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

会長講演

経済学と人間の労働

—「労働」から「活動」へ—

野地洋行

I アダム・スミスにおける「労働」

「世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである⁽¹⁾」
「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源（fund）である⁽²⁾」

スミスの経済学においては「富」の最奥の原理は「労働」であった。労働が資本家の労働を含むような論理の場面では、それを「勤労」（industry）とよびかえながら、スミスは富の源が労働であるというテーゼを守りつづける。それはスミスが、自然の中で自分の生命を再生産しつづける人類社会全体にとっての「富」のイメージを保持しつづけていたからだと思われる。“事物の自然の成り行き”からすれば、最初の産業は食料の生産にかかわる「農業」であると確言するとき（第三編第一章）、また地代論の中で、必ず地代を生ずる土地は食物を生産するための土地であるというとき（第一編第十一章）、また富とはさしあたって「必需品と便益品」とみられているが、この二つには確固とした論理的な順序があり、必需品は人間の生命維持に直接かかわるがゆえにまず食物であり、穀物や食肉であり（パン屋と肉屋と酒屋）、したがって必需品の生産は必然的に「農業」の重視とつながっているのを顧みれば判る。スミスは自然の中で、種として、人類として、労働によって自己を再生産している人間の姿を、「富」を論じつつ、しっかりと捉えていたのである。

初期未開の社会から商業社会への変化をとおして、スミスの「労働」価値説は投下労働と支配労働の間で、あるいは価値構成説と価値分解説の間で矛盾をはらむようになる。説明原理としての一

(1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London, 1776, Liberty Classics, Indianapolis, 1981. vol. I, p.47, 大河内一男監訳, 中公文庫, I, 53頁。(以下, *Wealth of Nations* と略称)。

(2) *Ibid.*, p.10, 訳, 1頁。

貫性や合理性からすれば、その理論的矛盾を指摘することは易しい。しかし問題は、なぜスミスがそんなにも理論的困難をはらみながら「労働」にこだわりつづけたのか、ということである。社会契約論者たちが「自然状態」にこだわりつづけたように。

スミスにとって分業＝労働分割 (division of labour) は単に生産力を高めるための技術や方策ではない。「交換」を介しての労働分割は、「人間だけが他人の助力を必要とする」という人間の種としての特性、社会的性格を示しており、共同労働を分かち合う自然の中での人類のありようを示しているのである。だから労働分割は一面でピン・マニュファクチャーのように生産力を高め、富に至る道でもあるが、他面で——社会的分業の面では——その「富」の世界を構成し、「富」の世界を自然の中に結びつける人間の共同社会関係それ自体にはかならない。

スミスは「労働」を肉体労働に限定もしなかった。それどころか哲学者を哲学者にするのは労働分割＝分業であるとかれはいう。哲学労働が人を哲学者にするのだ。聖職者や研究者や医師や法律家や弁護士についても「労働の価格」が論じられ、その限りかれらの職業もまた労働分割によって説明されている (第一編第十章)。それはロビンソン・クルーソーが絶海の孤島で、夜、油を灯して聖書を読むのと同じである。スミスは、肉体労働やブルー・カラーの労働だけが労働だとはいわなかった。資本家の「労働」までも含めた広汎な労働を (恐らくは賃労働との概念上の混乱をさけるため)「勤労」とよびかえているようにみえる。やがて「勤労」(industry) は「工業」となり、生命と血の流れは蒼ざめて「労働」と分離したのである。

スミスは労働価値説としての理論的一貫性を犠牲にする危険をおかしながら「労働」に徹底してこだわった。それは、この富の再生産の世界を支配する唯一の原理の存在をかれが信じたからにかならない。スミスが「道徳感情論」において、人間の行為の道徳性の判定は、第一審は人間によるほかはないとしても (それは見知らぬ観察者の「同感」(sympathy) に依拠するのだが)、最終審においては神の審判を信じたのとそれは同じ構造を持つといえよう。⁽³⁾ 倫理における第一審の裁判官が「同感」だとすれば、富の世界の第一審の裁定者は「市場」であり、市場価格の均衡であったといえよう。それにもかかわらずスミスはこの市場価格の均衡の奥に、それを最終的に規制する「労働」の存在を確信したのだと思われる。

見知らぬ第三者の「同感」が倫理の世界の直接の裁判官だとすれば、富の世界の直接の裁判官は自由な「市場」である。論を進めるにつれてスミスは「真の価格」たる「労働価格」から、「貨幣価格」へ、そして市場における有効需要を介して現われる「市場価格」へと議論を展開する。商品の価格を構成する利潤と地代もすべて市場の均衡を介してしかきまらない。

「市場」での均衡に議論が展開するにしたがって、「労働」は究極の基準としての投下労働から資

(3) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, 1759, Liberty Classics, Indianapolis, 1982, pp. 130-2, 水田洋訳, 筑摩書房, 248-250頁。これは第6版において、第3部への追加として述べられている。

本によって購買され、支配される労働（＝賃労働）に変わってゆく。基準であった労働が市場の均衡によって価格を指定される賃労働に転落する。それは労働者種族が生きていくことができるだけの生活資料の価格に置きかえられる。つまりはあらゆる富の源泉であり基準である労働は、同時に穀価やその他の必需品の価格にほぼ置きかえられ、市場で売買される商品の一つに転化する。諸国民の富を生み出す労働分割＝分業もまた労働者が直接実施するのではなく、「収入と資本の増加」を介してはじめて実現するのである。「賃金で生活する人々にたいする需要は、あらゆる国の収入と資本が増加するにつれて必然的に増加するのであって、それなしにはとうてい増加しえない。収入と資本の増加は国民の富の増加である」⁽⁴⁾。

スミスにおいて「労働」は二重に把握されている。それはあらゆる富の源泉であり、富の究極の基準であると同時に、他方では富の世界の支配者たる「市場」の均衡に支配される臣下である。スミスのこの理論的矛盾を指摘することは、今では限定された意味しかもたない。むしろ、スミスは後の経済学がその方向に進んだ均衡論の道を切り開きながら、他方では、なぜこんなにも「労働」に固執したのかこそが問題であろう。この問題に答えられない限り、経済学は富の技術学にとどまり、人間の科学たりえないと私は考える。

II なぜ労働は厭わしいものになったのか

——労働と遊び——

「労働」を人類にとって普遍的なものとして発見し、位置づけたのは近代である。近代の市民社会こそがスミスの「労働分割」＝分業（division of labour）の概念とともに、労働がこの社会の構成員であるための基本的な条件であることを明らかにした。「市民」とは、ルソーにあっては、主権に参加する「自由」な、国家の構成員のことであったが、スミス以後、⁽⁵⁾「市民」とは、この労働分割＝分業社会の構成員のことである。

では近代の市民社会以前には、なぜ思想史においても「労働」は人類にとって基本的な条件、普遍的な資格として認められることがなかったのか。一般的には、それは労働が、古代社会においては奴隷に、中世社会においては農奴に（そしておそらく女性に）ふさわしい属性とされ、人間社会の従属的で特殊な部分にのみ固有なものとされたために、人類にとって普遍的で基本的な条件であるとは考えられなかったからである。ポリスの市民にとっては、労働は単なる生命維持と動物的欲求にのみかわる低次元の活動領域に過ぎず、それは家長たる市民の公的活動領域の外の、私的な、

(4) Adam Smith, *Wealth of Nations*, vol. I, pp.86-7, 訳, I, 118頁。

(5) J.-J.Rousseau, *Du Contrat social*. Amsterdam, 1762, *The Political Writings of Jean Jacques Rousseau*, edited by C.E. Vaughan with Introduction and Notes, vol,II, Basil Blackwell, Oxford, 1962, pp.32-3. 桑原, 前川訳, 岩波文庫, 31-2頁。ルソーは「市民」とは「都市」の住民のことではなく、「主権」に能動的に参加する自由な人間としている。「都市」に関するヴォーン版の注は、1762年のルソーのノートからとられている。

オイコスすなわち家政の、隠されるべき陰の部分だったのである。

近代の資本主義の形成期においては、「労働」を価値的に高く評価する視点を見いだすことができる。この世で与えられた職業労働へのひたすらな専念こそが、最も神の喜ばれるところであるとするルターに始まるプロテスタンティズムの教義が、資本主義の精神の形成と親近性をもちうることはマックス・ウェーバーが明らかにしたところであり、ジョン・ロックが、労働こそが所有の権原であるとしたこともよく知られている。総じて形成期の資本主義においては、ロビンソン物語やスミスに見られる通り、人間の労働に積極的に道徳的な意味を認める姿勢がみられる。

しかしながら、労働を人類の普遍的で基本的な条件としてみるこの考え方には互いに対立する二つの視点が含まれていた。スミスについてはすでに述べたところだが、スミスが労働を「労苦と骨折り」(toil and trouble)として捉えていたこともよく知られている。スミスは一方で労働を「あらゆる富の源」とし、労働分割=分業を文明社会の促進力と認めつつ、他方でこの労働それ自体は「労苦」や「骨折り」、すなわち厭なこと、厭わしいこととみたのである。そして近代の経済学の歴史においては、「労働」を、自然の中で人間が生産する共同の富、自然と対峙する人類全体の富の「源」とみる視点が失われるとともに、労働それ自体に対する価値的な意味づけもまた失われ、労働は「不愉快」で、「肉体的不便」と「心的苦痛」⁽⁶⁾を意味するものとなり、さらに効用価値説において、労働は生産物の効用に対比されるべき費用⁽⁷⁾、マイナスの効用あるいは不効用となった。

なぜ「労働」はこのような激しい価値低落を経験することになったのか。それは市場社会においては、労働の殆どの部分が「支配」され、「購買」された労働、すなわち「賃労働」だからである。それは資本の目から見れば機械や土地と同じ生産要素の一つに過ぎず、利潤蓄積への効率の視点から選択されるべき、他の生産財と代替可能な生産要素に過ぎない。労働者自身にとっても、労働はかれの生命力に由来する、エネルギーの内発的な発揮ではなく、生の喜びやその証でもなく、かれ自身の目的意識的な行為でもまたなく、さしあたって生活のための手段、生きるためのやむを得ない、心ならずもの「労苦」である。ここでは誰も自分の好きな労働を、自分で、自分が好きなように、好きな仲間と営むことは難しい。さしあたって人は賃金を貰って企業に就職し、生計を立てるほかはない。われわれが現在労働という言葉に感じとるマイナスのイメージは、われわれが余暇や、レジャーや、自由時間という言葉に感じるプラスのイメージと正確に対応している。

形成期の資本主義においては「勤労」という言葉で、美德として、高い価値を与えられていた労

(6) J. S. Mill, *Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy*, 1848, Edited with an Introduction by W. J. Ashley, Longmans, Green and Co., London, 1920, p. 22, 戸田正雄訳, 春秋社, 第1巻, 41頁。

(7) その理論的起源はほかならぬスミスの中に見いだされる。「あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの価値があるかといえば、それによってかれ自身がはぶくことのできる労苦と骨折りであり、換言すれば、それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである」。Adam Smith, *Wealth of Nations*, vol. I., pp.86-7. 訳, I, 52-3頁。

働が失ったその良き部分はどこへ行ったのか。それは「遊び」として、「労働」から切り離され、排除されたのである。

ホイジンガーは、労働ではなく、「遊び」こそが人間の本質なのだと主張する。遊びは生活維持の必要からではなく、それ自体の為に営まれる行為である。人間だけが持つ文化はすべて、遊びに由来し、遊びとしての性格をもっているとかれは言う。遊びは肉体的必要を超えた、面白さや喜びを本質としている。その形式的な特徴は、第一に自由な行動であること、第二に利害関係を離れ、必要や欲望の外にあること、第三に日常生活から時間的、空間的に区分されていることである。⁽⁸⁾

ホイジンガーはなぜこのように労働ではなく、遊びが人間にとって本質的なものであると強調するのか。その著『ホモ・ルーデンス』の後半でかれは言う。十九世紀には「労働と生産が時代の理想となり、やがてその偶像となった。ヨーロッパは労働服を着込んだのだ」「経済的なもろもろの力関係、利害関係が世界の歩みを決定し、支配しているとする恥ずべき誤った考えが生まれ、広まった」「社会は科学的目標をたて、自らの現世の安楽にはげんだ。労働、教育、そして民主主義という理想は、遊びという世紀を経た原理に殆ど余地を残さなくなったのである」⁽⁹⁾。

十九世紀における市場社会の全面的な展開は、かつて共同体の「祭り」のなかに一体となっていた遊びと労働、聖なるものと日常的なもの、意味をもつものと単に必要であるものを容赦なく引き裂き、後者に支配権を与えたのであり、ホイジンガーはこの物質主義、功利主義、決定論、経済中心主義の支配に対して、恥ずべきものと抗議し、人間に精神と文化と意味の復権を促すのである。

言い換えれば、労働から面白さも喜びも自由も失われ、日常生活の物質的 necessary のためやむなく営まれる行為になり、したがって労苦と骨折りとなった時代だからこそ、ホイジンガーはそれら人間の行為のうちの善きものを、労働の外に、遊びとして、見いだそうとしていると言えるだろう。こうして労働から意味が見失われるにつれて、遊び、レジャー、余暇に人間の生の意味が過剰に与えられることになった。

労働が、人間の生命維持にかかわる領域に限定され、欲望と必要という動物と異なる次元に局限されたからこそ、それ故にまた労働が肉体労働や単純労働としてしかみられないからこそ、そのような卑しむべき労働が世界の運命を決定するという（恐らく唯物史観の）「恥ずべき」主張は退けられねばならないとホイジンガーは言うのだと思われる。このようなホイジンガーの主張は、ハンナ・アレントが古代ギリシャの哲学的思惟にさかのぼりつつ、人間の活動的生活を「労働」と「仕事」と「活動」に分節化し、公的な場での、人と人との間の言葉だけを通した相互行為である「活動」に対して、「労働」を、私的な、人間の動物と異ならない、低次の欲望充足、単に物質的な

(8) Johan Huizinga, *Homo Ludens*, 1938, ここではフランス語訳本を参照した。“*Homo Ludens, Essai sur la fonction sociale du jeu*” traduit par Cécil Seresia, Paris, Gallimard, 1951. pp.25-9, 高橋英夫訳, 中公文庫, 29-34頁。高橋訳はドイツ語版を主として使用しているため、訳も多少手を加えた。

(9) *Ibid.*, p.307, p.311, 訳, 390頁, 394頁。

必要のための行為と見たのと通ずるところがある。⁽¹⁰⁾ いずれも人間の知的な活動や、理念的あるいは目的意識的行為を「労働」概念から排除しているからである。

こうして労働は「賃金を手に入れるための行為」に限定され、したがって苦役となり、結果としてその対極に人間的価値の領域として遊びや余暇が想定されたのだと思われる。ちなみに「労働」と「余暇」が時間的、空間的に分離されるようになったのはそんなに古いことではなく、やはり近代の市場社会の発展によってであった。産業革命の進行とともに、農村共同体の解体と、新興工業都市への人口の集中、そしてマニュファクチャーや機械制大工業による労働者層の社会的形成とそれに伴う労働規律の強化が進む。朝、季節によって異なる日の出とともに働き、日の入りと共に労働を終え、たいていの場合は生活の場も労働の場も同じであった農業や農村家内工業とは違って、今や労働は機械の生理に合わせて朝、六時のサイレンと共に一斉に始まり、夕方、再び機械の停止とともに一斉に終わるのである。区別されることのなかった労働の場と生活の場もまた空間的に分離され、工場とその周辺に配置された労働者の居住区となった。種蒔きや収穫の労働に組み込まれていた「祭り」（遊び）もまた分離する。労働と遊びは対立するものとなったのである。

哲学の歴史においても、ヘーゲルがスチュアートやスミスの経済学をまなび、市民社会が「欲望と労働」の世界であることを認めた。それが必然性の領域であるがゆえにヘーゲルは、より高度な人間の倫理性をそこ（市民社会）に求めることはできないとし、それを国家に求めたのである。ここでも人間的な価値は「労働」の外に求められている。

『自由主義の再検討』において、故藤原保信氏は現代の経済学と自由主義の結びつきを確認しつつ次のように言っている。自由主義の根本的な価値観は功利主義であり、功利主義は快楽を善とし、苦痛を悪として、社会的快楽の最大化と社会的苦痛の最小化をめざし、「最大多数の最大幸福」こそが道徳や社会制度の判断基準である。今日では「苦痛と快楽はより洗練された形で選好（プリファレンス）という言葉に置き換えられて」おり、「ひとり選好や効用をいう経済学のみならず、今日のおおかたの社会科学が、意識的にせよ無意識的にせよ功利主義をみずからの価値前提としていることは明らかであろう」と指摘している。⁽¹¹⁾

人間を欲望主体としてとらえ、したがって人間の行動動機を「欲望」の充足という人間存在の最も基本的で、直接的な生命維持の過程に直結するのと同時に限定し、この行動動機をさらに抽象度を高めて価値観として一般化するとき、この人間観は「最大多数の最大幸福」という功利主義の原

(10) Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, Chicago & London, 1958, p.72. 志水速雄訳、ちくま学芸文庫、102-3頁。「隠されたものはすべて生命過程そのものと結びついており、近代以前には、個体の維持と種の生存に役立つすべての活動力を含んでいた。したがって、隠されていたのは、『肉体によって生命の（肉体的）欲求に奉仕する』労働者であったし、肉体によって種の肉体的生存を保証する女であった」。アレントの労働論については、稿を改めて論じたい。

(11) 藤原保信『自由主義の再検討』、岩波書店、158頁。

理に到達したのを我々を見る。自己保存の追求者（ホッブズ）から私益と自己愛の追求者（スミス）へ、そして快樂の追求者へという人間像の転換過程はそれ自体社会思想史の道である。そして「快樂」が愛他的な行為を含むかどうかの議論もあった。それらについてここで触れることはできないが、スミス以後、経済学歩みを顧みれば藤原氏の指摘はあたっていると思われる。

勿論、現代において一人一人の経済学者がすべて人生観、価値観、思想において功利主義者であると言うことはできない。現代では経済学者が同時に思想家であることは期待もされていない、要求されることも少なくなった。自然科学においても社会科学においても、現代においては科学の、というよりは知的＝精神的労働の細分代、分業化はますます進行し、科学的知識は一層道具的なものとなり、科学者という「知の技術者」は、その道具の使用自的に対して責任を問われることが少なくなり、その責任もまた「市場」に委ねられるのである。現代はもはやアダム・スミスやニュートンの時代ではない。経済学者は経済学的知識の提供者であればそれで職業的には十分の資格を持つのである。経済学者は政治家でもなければ宗教家でも道徳家でもない。社会主義者の経済学者もいればファシストの経済学者もいる。現に中国など、社会主義国において市場経済の導入が論じられているのをみれば、経済学者がその思想において功利主義者である必然性は必ずしもないことが判る。だが経済学が人間の欲求や必要、生命維持にかかわる科学である限り、経済学が（個々の経済学者が、ではなく）前提とする価値観が功利主義であることを否定することはできないであろう。そうでなければ経済学の対象あるいは固有の領域が成り立たないからである。そうだとすれば、そこにおける「労働」は、欲求や必要、生命維持のために耐えるべき「労苦と骨折」、効用の対価として犠牲にされるべきマイナスの効用としてしかとらえられないことになる。

III 人間にとっての「労働」

市場経済における労働は、その支配的な部分が賃労働である。したがってそれは苦役であり、マイナスの効用である。だが、カール・ポラニーとともに、「市場経済」を離れ、ロビンソン物語やフーリエの世界、あるいはレヴィ・ストロースやマリノフスキーなどの研究の成果などを念頭に置いて、「自然の中で自己を再生産する人間」という目で労働を見返してみると、人間が人間として生きていくのに必要な「人間の営み」としての労働が見えてくるだろう。

例えばフーリエの共同体は財産の共同体ではなくて労働の共同体である。そこで共同化されるべき労働は、（１）家庭労働、（２）農業労働、（３）マニュファクチャー労働、（４）商業労働、（５）教育労働、（６）科学の研究と応用、（７）芸術の研究と応用、とされている。⁽¹²⁾ フーリエの場合、共

(12) F.-M.-Charles Fourier. *Le nouveau monde industriel et sociétaire*, 1845, Oeuvres Complètes de Charles Fourier, tome VI, Paris, Édition Anthropos, 1966. p.7. 田中正人訳, 中央公論社, (世界の名著, 続8, 所収) 447頁。

同化されるべき第一の労働は「家庭労働」なのである。このような主張が現代のフェミニズムの運動に直接つながることは余りに明らかであろう。市場経済においては家庭労働、すなわち現代では多くの場合女性によって担われている家事労働、とりわけ育児や出産という人間自身の再生産にかかわる労働が、それらが商品化されず、価格がなく、したがって利潤を生まいがゆえに「労働」とは認められず、国民所得には記載されないことを顧みれば、その主張の連続性は容易にみて取れる。同じ主婦の労働を、例えば、清掃労働、洗濯労働、食事提供労働、雑事処理労働、老人の介護労働などに分解し、それらを「市場」で企業から購入するとすれば、それらの労働はたちまち立派な商品化された「労働」と見なされ、その貨幣価格は国民所得に算入されることになる。

勿論、だからといってフェミニストたちは女性の労働を「苦役としての労働」に組み込むことを主張する訳ではない。そうではなく、人間の生きる営みに、人間にふさわしい品位を取り戻すと同時に、それを市場による忘却と無視から回復することが目指されているのである。フーリエの場合には、労働を「快樂」に転化させると同時に、共同体にとって不可欠な第一の「労働」として認知しようとする。この過程は二重である。「労働」としての認知の過程と、「労働」概念の転換の過程との二つの過程がここに含まれており、それゆえにフーリエの場合、それは「市場」における価格システムの否認につながるようになるのである。

これはほんの一例に過ぎない。スミスにおいてだけでなく、現代の「富」の世界においてもその専制君主は「市場」である。市場によって認知されない労働は「労働」とはみなされない。主として女性に担われてきた家事労働以外にも、市場によって黙殺されてきた人間にとって不可欠な「生の営み」や行為は無数にあるに違いない。われわれが余りに市場的な物の見かたに馴れ親しんでしまった為にそれが見えなくなってしまっただけである。あるいは逆に、市場が認知してはいるが、それが人間に不可欠な「生の営み」と言えるかどうか、大いに疑わしい「労働」も数多い。例えば、売買された臓器の移植、高額な葬儀や戒名、売買される嬰兒の出産、大規模な自然破壊を伴うゴルフ場の建設、水質汚染を生む有機化学製品の生産等々が挙げられよう。

「市場」は、「経済学」にとっては自明の前提であるけれども、人間にとって、人類としての人間にとって、自然の中で共同存在する種としての人間にとってはそうではない。労働の配分システムとしての市場は信頼できるとしても（例えば社会主義における市場システムの導入の試みをみよ）、「労働」の認可システムとしての市場を信頼することには大きな危険が伴うことは明らかであろう。労働配分のシステムは経済学の領域だが、「労働」認可のシステムは習俗、慣習、文化そして価値にかかわる領域だからである。諸個人の自由な選択を前提とする需要と供給、その均衡に基づく労働配分、いや労働配分だけではなく、資源一般の配分のシステムとしての「市場」は、巨大化した社会にとっては、恐らくそれ以上の配分原理を考えることは難しい、優れたシステムと言えるかもしれない。スターリンや社会主義官僚の予測や計算による決定よりもそれは優れている。しかしその同じ「市場」は、かつてのように社会の片隅でひっそりと控え目に（朝市、十日市、など）、ある

いは補助的な原理（商人資本またはヴェニスの商人）として生きるのではなく、「市場社会」の成立とともに社会全体の専制君主となり、文化そのもの、構成員の価値観、習俗、慣習の支配者、決定者になったのである。その決定原理は、市場価格のコントロールだけに従っているために、人間と自然の再生産という視点からみると、それ自体を危うくするところがあるに違いない。それゆえにわれわれは、「労働」を市場の認可システムから解放すると同時に、その（労働の）意味転換をも試みざるをえない。

IV 「労働」から「活動」へ

労働を「労苦」ではなく、自然の中における人間の生の営み、「活動」としてとらえ返すことによって、人間が人間である証しとしての労働のイメージを取り戻すことができるかも知れない。もし賃労働としての労働が、そのまま人間が人間である証しであるとするれば、労働する必要のない障害者や病人、老人にとって生きる証しとは一体何であろうか。これらの人々にとって生きる意味は既に失われている事になるだろう。だが報酬のためではなく、もっと広い意味での行為や営みを「活動」としてとらえ返すならば、賃労働から失われた自由や喜びや意味をそこに見いだすことができるかも知れない。

体制が変革されれば、労働が苦役ではなく、喜びになるという考えもまた幻想であった。労働を苦役から転換する道は、日々の労働観を作りかえること、労働概念の変革を伴わない限り、開かれないように思われる。労働観の転換は人々の日常的な関係の転換であり、少なくともそれを伴わない限り、体制の変革は貧しい意味しか持ちえないことは歴史がすでに証明している。

定義してみよう。「活動とは、自然の一部である人間が、自分の外の自然に働きかけ、種としての自分自身と外なる自然とをともに再生産すると同時に造りかえる能動的な過程をいう」。因みに国語辞典には、「労働」とは「人間がその生活に役立つように手、脚、頭などを働かせて自然質料を変換する過程」（『広辞苑』）とされている。

この「活動」の定義には次のような考え方が前提されている。第一に、自然と人間とは別物ではなく、同じ一つの「自然」の構成要素であること。第二に、「活動」は、人間と自然を結びつけると同時に、種としての人間を自然から限りなく引き離し、人間を自然と対立させる当の主人公であること。第三に、この人間と自然との相互関係は、終わりもなく、予定された道筋も無い無限の過程であること、などである。このような考え方からすると、自然の中に埋もれていた人間が、人間という特殊な種になったのは、まさにその「活動」によってであり、この意味で活動は、人間が人間らしさを獲得する契機であり、人間が人間である証しでもあると言えよう。人間達はその活動によって理性と精神を獲得したのであり、その活動によって共同社会を形成したというだけでなく、まさに共同社会を形成していることを自覚した種となったのである。

この「活動」の定義と、国語辞典の定義とを比べると、後者では、人間と自然がはっきりと対立しており、「労働」は、自然を人間生活の手段として利用する立場からとらえられているのが判る。そのことはさておき、筆者は人類の発展史を論ずる任にはないが、近年来、毎年発掘され、報じられる古人類の化石や遺跡の調査が、この人類発展のミッシング・リンクを埋めつつあり、さらに分子生物学や遺伝子の研究がこれに拍車をかけているという周知の事実は指摘しておくべきであろう。そして前世期の末、ソシュールに始まる言語学の展開も、この「人類」なるものの特質の把握に深い影響を与えた。これらのことを前提に、人間の活動の独自性を以下の三点に集約しよう。すなわち（１）目的意識性、（２）言語使用、（３）共同性。以下これらについて検討してみることとする。

（１）目的意識性。

人間の活動の特質の一つは、自分の行為の目的を自覚し、その目的とそれを実現するために用いる手段の関係について、明確な意識を伴っていることである。ただ活動するだけなら犬や猫もまた活動する。ただし本能に従ってである。人間のこの目的意識性はどこから来たのだろうか。

マックス・ウェーバーはいわゆる『客観性論文』の冒頭で、われわれの科学はもともと「技術」から出発したと述べている。「われわれの科学が歴史的にはまず実践的観点から出発したということは、われわれがみな知っているところである」「それは医学に対して臨床学が技術であるというような意味で『技術』であった⁽¹³⁾。では「技術」とは何であろうか。

「技術」については、わが国に技術論論争があったことは知られているが、ここではこれにも立ち入らない。さしあたり、「技術」とは、人間にとって必要な何らかの生産物を作り出すための活動において用いられる道具立て、及びそれらの使用法についての知識の体系、またはその個々の構成要素である、という一般的な規定を受け入れよう⁽¹⁴⁾。つまり「技術」は、広くいうと、ある「目的」に対する「手段」と、それについての知識の体系なのである。自然の中で生きる人間は、その生存のための活動の中で、「技術」すなわちある目的達成のための道具と、その使用とコントロールに必要な知識の体系、そしてそれに相応した身体的な形質を獲得した。その前提には、「二足直立歩行」とそれによる手と頭脳の発達が想定されるがここでは立ち入らない。

このように、人間の自然に対する働きかけ、「活動」を中心にみる限り、われわれの理性や知的能力は、はじめ技術として出発したと言えよう。人間の活動の第一の特徴は、動物が本能によって行動するのは異なり、人間はその目的を自覚し、その目的に適合した道具とそれについての知識によってそれを実現する所にある。この目的と手段の関連の意識は、本来「生存」という人間にと

(13) Max Weber, *Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozial politischer Erkenntnis*, 1904, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, J.C.B. Mohr, Tübingen, 1982. S.148, 恒藤恭他訳, 岩波文庫, 12頁。

(14) 大百科事典, 平凡社, 項目「技術」(執筆者 吉岡斉)

っては自明な目的、あるいは価値から生じたものなのであるが、やがて「目的意識性」を超えて、目的や価値それ自体の設定、定立をも人間の活動の特質とするに至った。現代の労働において、労働の目的と結果、その関連などが見えなくなっているとしたら、それは人間から人間固有の目的定立や目的意識性が失われていることを意味する。そして分節化した人間労働のあらゆる局面においても、同じ事が生じているに違いない。この分節化は、肉体労働の中に生じているだけでなく、肉体労働から分節化した頭脳労働自体の中にも生じている。科学者が知の技術者になり、その「知」が人間にとって、どういう目的や意味をもつのか、無関心になっているのを見ればそれが見て取れよう。経済学者が思想家でもあることを期待されなくなったのには理由があり、オルテガが科学者こそが大衆なのだ⁽¹⁵⁾、と言うのもこれと関係していよう。

(2) 言語使用。

人間の「目的意識性」という特質は、個体としての人間によっては決して獲得されないし、また伝達されることはない。種としての人間が持つこの高度な知的能力は、人間が本能を抑圧する代償として獲得されたものである⁽¹⁶⁾。そしてそれが種としての人間を特徴づけるものである限り、それは人間という種全体によって共有化されていなければならない。そしてこの共有化、共同化を保証するものが「言語」である。「言語」はそれ自体、直接的に人と人の関係にほかならないから、人間の共同存在性そのものである。それは人間の共同生活を前提とするし、またそれを作り出す。語るべき相手が存在しない「言語」は不可能なのである⁽¹⁷⁾。自然の一部でありつつ、自然との闘いの中で、人間は種の能力としての「言語」を手に入れた。人間は言語によって、事実としても、自覚においても「類的存在」なのである（人間の脳における言語中枢の発生は、その生物学的な現れであり、チンパンジーにはその萌芽しか認められないという）。

この獲得された能力である「言語」は、情報伝達のために必要な発音器官や聴覚器官の発達と、認識能力や抽象化能力や概念化能力の発達を伴って初めて可能なのだが、ひとたび成立すると、「言語」自体として「構造」をもつものとなる⁽¹⁸⁾。人間の長い歴史の中で、無意識の過程の中で形成されたものではあれ、「言語」は構造を持つがゆえに“人間が知らぬ人間理性”（レヴィ・ストロース

(15) Jose Ortega y Gasset, *Lebelion de las Masas*, 1930, ここでは英語版を参照した。 *The Revolt of the Masses*, A Menton Book, N.Y. 1951, p.79. 桑名一博訳, 白水社, 158頁。「したがって、今日の科学者は結果的には大衆人の典型ということになる」。

(16) Herbert Marcuse, *Eros and Civilization, a Philisophical Inquiry into Freude*, Beacon Press, Boston, 1974, p.11. 南博訳, 紀伊国屋書店, 9頁。

(17) Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, Teil 2, (MEGA), Dietz verlag Berlin, 1981, S. 394. 訳 (『マルクス資本論草稿集』(2), 第二分冊), 大月書店, 141頁。「一個人の所産としての言語というのは、不可能 (Unding) である」。

(18) 構造主義的思考の出発点をなす、十九世紀末におけるソシュールの言語学の意味については、以下を参照。丸山圭三郎『ソシュールの思想』, 岩波書店, 1981年。

『野生の思考』)として、人間の活動の理性的、共同的性格、あるいは共同理性的性格を示し、かつそれを創造する。人間の知的特質は「言語」によって共有化され、共同化されると言える。それは人間の活動の共同性の結果であり、その証明であり、その創造でもある。要するに、「言語」は、人間が自然に働きかけるにあたって、人間相互の意志伝達的手段となり、それによって人間を共同存在にする。言語がもつ規則性、体系性、構造、そして恣意性は、人間の抽象的思考能力を支えていると同時に、それを発展させ、人間の活動を目的意識的なものとする。そして「言語」は知識を蓄積させ、それを時間と空間を超えて伝達できるようにし、それを人類の共同の財産にすることによって、さらに人間の能力を加速度的に発展させたのである。

このように、言語が人類によって獲得された共同の能力であるとすれば、人間の「活動」の概念には、「目的意識性」と共に、「言語使用」が、共有された人間の能力として含まれるのは明らかである。目的設定や目的意識性は、言語によって人類共有の能力となったのであり、言語はそれ自体人間の共同性の証明である。そうだとすれば、人間の活動の第三の特質は「共同性」それ自体であると言えよう。

(3) 共同性。

本来、人間の活動の共同性は、自然的に前提されたものであった。自然と人間を最初から対立するものとしてではなく、人間を、自然の中で生きる人間として考えるとき、人間にとって前提とされている人間の自然は「共同体」であった。群居集団としての人間、種族としての人間が、人間の自然であり、出発点であった。「血縁」と「大地」(そして言語や習俗や慣習や信仰や律法など)の同一性にもとづく活動の共同性の基盤は「共同体」である。⁽¹⁹⁾それは近代の「市場社会」の前提としてあったものであり、市場はこれを自分の原理に適合するように解体し、作り変えたのであった。確かに市場社会は、血縁に基づく狭小な共同体や、地縁による土俗的な共同体を、国民国家規模の政治的共同体に拡大し、さらには世界にまで広げようとしている。しかしそれは同時に、その共同性を市場の共同性として、市場価格が編成原理である共同性として作りあげ、変形してもいる。市場の共同性が、自然の中で自己を再生産する人類の共同性と、必ずしも一致するものではないことは、既に述べた通りである。

市場社会は共同体を解体することによってはじめて成立した。共同体のきずなであった「血縁」と「大地」に基づく結合を、ミニマムにまで溶解し(完全に溶解することはできない。もし完全に溶解したら、人間自体が存在し得ないからである。両親を持たず性を持たない人間はいないし、大地に居住

(19) Karl Marx, *Ibid.*, S.394, 訳, 141頁。「生産者が、自分自身に属する非有機体的身体に対する様態で関わるこの自然的生存諸条件は、それ自体二重のものである。すなわち、(一)主体的自然(二)客体的自然である。彼はある家族、部族、氏族、等々——の成員として存在し、そしてそのような成員として、一定の自然(すなわちここではまだ大地、土地)にたいして、自分自身の非有機的定在にたいする様態で、自分の生産および再生産の条件にたいする様態で連関する」。

しない人間もまた存在しない), 人間たちの新しい結合原理として「市場」をうちたてた。それに対応して共同体は「個人」に分解され, 社会は諸個人によって構成されることになった。市場によってのみ結合するこれら「個人」の行動原理, あるいは行動動機は「自己保存」「自己愛」「私益の追求」にほかならず, それは経済行動の基準であるだけでなく, 倫理や法の原理でもあることを主張するに至った。功利主義の成立である。市場社会という新しい共同社会は, その対極に私益の追求者である「個人」を創り出したのである。エゴイストによってのみ構成される共同社会というパラドックス!

だがこの過程を共同性の喪失として, 否定的にだけ見ることはできない。第一にはそれが「市場」という, 新しい共同社会の構成原理の創出だからであり, 第二には「市場」が, 狭小な共同体の限界を打ち破り, 人類のつながりを世界にまで広げたからであり, 第三に「市場」は, それを構成する個人をエゴイストにすると同時に, 「自由」で「平等」な市民ともしたからである。古い共同体における人間たちの関係が, 上位と下位の「人格的依存関係」⁽²⁰⁾であることを考えると, それが引き返すことのできない歩みであることが判る。「市場」は自由で平等な「個人」を日々, 新しく作り出すことによって, 自分を支えるとともに, 自分を拡張する。自由と平等がなければ, 交換, したがって, 市場は成立しないからである。

ここまで見てきたように, 人間の活動の共同性は, われわれの時代にあっては, 肯定と否定の二重の性格をもつ。かつて共同体の中に「埋め込まれ」(imbedded, embedded), 二次的な動因でしかなかった「利益追求」の原理は, やがて一人歩きを始め, 自ら市場経済を形成したのである。市場経済は一人歩きするだけでなく, 文化や価値観など, 経済以外の他の領域を支配しようとする。⁽²¹⁾それは人類が前提する自然と人間を破壊してやまない。

それでは, 「労働」を「活動」へ転換するとはどういうことであろうか。人間の活動の共同性が二重であるのに対応して, 現代におけるわれわれの労働もまた二重である。苦役としての労働は, 直接的には個人の生存を目的としているが, 結果としては社会的な意味を持つ。それゆえに現代の労働は, それ自体アンビバレントな性格をもっている。もし「体制の変革」が労働の質を変えなかったとすれば, われわれは自分自身の「労働」の意味転換からはじめるほかはないだろう。それはどのようにしてか。

第一に, 目的設定と目的意識を, 「労苦」としての日常の労働の中で取り戻すことによってである。それは自分の労働の, 「共同社会」にとっての意味を問うことであり, 自分の労働をその中で

(20) Karl Marx, *Ibid.*, Teil 2, S.90. 訳 (同上 (1), 第一分冊), 138頁。「人格的依存関係」の原語は, “persönliche Abhängigkeitsverhältnisse”。

(21) Karl Polanyi, *The Great Transformation, — The Political and Economic Origins of Our Time*, Octagon Books, N.Y., 1975, p.57. 吉沢永成他訳, 東洋経済新報社, 76頁。かれは時に “submerged” と表現している。cf. p.46. 訳, 61頁。

位置づけることである。労働の意味を、自分「個人」にとっての意味だけに限定するとき、それは個人の利益、出世、富、快樂、のための止むをえざる支出、不効用となる。組織の中での個人の地位の上昇だけを、その労働の目的とする者には、「共同社会」の中でのその組織の存在目的、存在理由が見えないし、それを問うこともできない。だが、歴史に残る一流の政治家、学者、科学者、企業家、官僚、ジャーナリスト、法曹家、芸術家、教育者、労働界の人たちはすべてこの「問い」の視点をもっており、そうであるが故に輝かしく現れる。

目的設定と、設定された目的へ労働をコントロールする能力それ自体もまた、私的目的に奪い取られ、私物化されている可能性がある。上のような絶えざる「問い」は、このように特権化され、奪われた目的設定やコントロールの権利を共同社会に取り戻すことにもつながっている。

第二には、「言語」がそれ自体前提としている、人と人との間の失われた直接的なコミュニケーションを回復することである。その回復は、上に述べた自分の労働の目的の設定や、コントロールをめぐる、今では相互に孤立している他者との、「言語」によるコミュニケーションを通してしか可能ではないし、また、目的設定や目的へのコントロールを自分のものとして取り戻す過程は、内実としては「言語」によるコミュニケーションの回復を意味している。わが国だけではなく先進諸国で、「言語」をもたない外国人労働者たちが、いわゆる3K労働に就いているのをみれば、私的に設定された目的にとっては「言語」が不要であり、無い方がむしろ都合が良いことを、象徴しているようにさえ思われる。そしてこれとは対極的に、「言語」は市場によって指名され、独占権を与えられた人々によって占拠されてもいる。視聴率、発行部数、得票率（タレント候補など）、合格率、利用率など、そしてまた様々な組織における「役職」や「肩書」もまた市場支配の代理人である。だから日々の労働において、「言語」による交通（der Verkehr）を回復することは、それ自体この特権に対する批判となろう。

そして第三に、以上のこと、すなわち沈黙を強制され、言説を占拠され、そのことによって目的とそれへのコントロールから排除された労働に「言語」を取り戻すことが、結果として「共同性」を人類にとりもどすことにつながるのではなからうか。誰かが「共同性」をア・プリオリに詐称するのではなく、日々の労働の中で、言語を通して労働の目的を共有し、共同化する努力、その過程が同時に人と人との直接的で、人格的な関係を取り戻すことであり、かつ「労働」を「活動」に転換する道なのではないか。

目的の見えない労働は苦役である。コミュニケーションを奪われた労働は苦役である。自分の生存だけのための労働は苦役である。

（経済学部教授）